

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

近代モンゴル社会に対する認識： 梅棹認識の位置づけ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 太平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00005976

近代モンゴル社会に対する認識

— 梅棹認識の位置づけ

ウルゲディ・タイブン

内モンゴル大学

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 西北研究所とは | 5 梅棹見解への批判 |
| 2 「梅棹報告」の主要内容 | 6 近代モンゴル人の歴史意識から考える |
| 3 チャハルとシリーンゴルについて | 7 結語 |
| 4 漢人入植に対する梅棹の見解 | |

1 西北研究所とは

本題に入る前に、西北研究所について簡単に紹介したい。1933年、東京において対モンゴル友好工作機関として善隣協会が創設された。笹目恒雄ら有力者が中心となり、林銑十郎、山本条太郎など軍部、財界の援助をうけて発足した。内モンゴルでの種々の調査研究のほか、医療、畜産、教育、実業など広い活動をおこなった。1940年、その内蒙支部が蒙古連合自治政府の樹立に伴って蒙古善隣協会（理事長：井上璞）として、東京の善隣協会と分離して、蒙古連合自治政府の首都の張家口に設立された。1944年春、善隣協会の調査部を改編する形で、大東亜省管轄のアカデミックな研究所として、西北研究所が設置された。満州・内モンゴル一帯の生態学・民族学的調査が主な業務であり、大興安嶺探検を成功に終わらせた今西錦司は研究所長として迎えられた。名称の由来は不明であるが、「西北」とは東トルキスタン・河西回廊一帯も意味し、大日本帝国の版図を世界に広げようとする野望の表明である（本田 1992：157）。研究所の主任を務めた藤枝晃によると、善隣協会というのは、そもそもその時分、新京で最初出来て、東京に本部があって、つまり関東軍の一步先に出て行って民間に入り込むという国策団体である。それで、満州からドローン・ノールを通過して、内モンゴルにずっと軍隊より一步先に出て行った勇ましい団体である（本田 1992：156）という。

西北研究所員は、つぎの所員で構成された。今西錦司（所長）、石田英一郎（副所長）、所員として藤枝晃、磯野誠一、森下正明、野村正良、酒井行雄、甲田和衛、中尾佐助、和崎洋一、菊地杜夫、梅棹忠夫、加藤泰安、囑託として磯野富士子。研究所のプロジェクトとしては、今西錦司、梅棹忠夫らによるモンゴル研究、佐口透、岩村忍らのイスラーム研究（民族研究所との共同プロジェクト）があったが、設立翌年の1945年には、日本の敗戦により廃止され、活動期間は短く研究所としては目立った業績を上げることは出来なかった。しかし、今西を筆頭にいわゆる「京都学派」のフィールド・ワーカーが

結集しており、満鉄調査部などと異なって、所員には研究成果を日本に持ち帰ることが許されたため、その時の調査結果を利用して、戦後多くの論文が書かれ、「今西進化論」などの理論的發展を準備したといわれる。

本稿で取り上げる「西北研究所内蒙古調査隊報告」は、上述した当該研究所のモンゴル研究プロジェクトによりまとめた重要な業績である。しかし、1945年当時、印刷発行されることはなかったが、のちに、『梅棹忠夫著作集』を編集するにあたり、もとの報告草稿を整理・清書して、第2巻『モンゴル研究』（1990年）に収録された。収録時の「解説」によれば、内モンゴル調査隊は長期間におよぶ調査をおこなって、1945年2月末に張家口に帰ってきた。その後、調査隊による調査結果の整理がはじまり、それを完全に整理して最終報告書を作成するには多大な時間が必要であったという。そして、1945年3月に報告会が開かれ、梅棹が調査結果の概要を報告した（梅棹 1990：128）。それは、この「西北研究所内蒙古調査隊報告」（以下、「本報告」、または「梅棹報告」）のもとになる。

2 「梅棹報告」の主要内容

「本報告」の構成を見る。各項目には便宜上筆者が番号を付けた。

一、はじめに

- 調査の概要 ①
- 生態学の立場から ②
- 問題の提起と調査の方法 ③

二、蒙古牧畜のとらえかた

- 蒙古牧畜は原始的か、高度のものか ④
- 牧畜技術の評価 ⑤
- 牧野の経営 ⑥
- 遊牧の起源 ⑦
- 自然適応の技術 ⑧
- 経済としての牧畜 ⑨
- 「しもたや」牧畜 ⑩

三、蒙古牧畜社会のとらえかた

- 牧畜社会の適応性 ⑪
- 平板な社会 ⑫
- 「職業」の意味 ⑬
- 血縁と地縁 ⑭
- 社会と人口 ⑮

チャハルとシリーングル ⑩

漢人との接触 ⑪

蒙古の近代化 ⑫

以下、構成にしたがって、各項目の概要を紹介し、若干の所感を記すこととしたい。

まず、「はじめに」の②と③では、モンゴル牧畜を生態学の立場から捉えている。「牧畜は、牧畜民と家畜とのあいだの相互関係であり、さらにその環境としての牧野があります。したがって、内蒙古の牧畜の研究といいますが、生態学の立場にたつかぎり、はじめから、植物も、動物も、人間も、どのひとつもはずすわけにはゆかないのです。牧畜の舞台である牧野と、牧畜の対象である家畜と、そして牧畜の主体である牧畜民と、この三つを三位一体としてとらえて、はじめて牧畜の生態学が成立するのであります。」(梅棹 1990 : 130-131) といい、基本的に米内山庸夫が1943年に発表したモンゴル牧畜生活における「三位一体説」の踏襲であると言ってよからう。

当時の西北研究所による現地調査は、1944年9月はじめから、翌年の2月末まで、ちょうど半年間にわたっておこなわれたもので、梅棹がつくった資料だけで、ノートが8冊、野帳が21冊、そして、スケッチが約150枚というかなりの分量であり、全体としての資料は膨大な量にのぼる(梅棹 1990 : 131) という。調査範囲は、蒙古連合自治政府の支配地域であったチャハル盟の大部分と、シリーングル盟の東、西スニト旗に限定されていた。

つぎに、「蒙古牧畜のとらえかた」は、モンゴルの牧畜をどうみるか、モンゴルの牧畜技術をどう評価するか、そして、モンゴルにおける牧野経営をどうみるかということで、先行研究とのかかわりを軸に議論展開している。モンゴルの牧畜は、いったい原始的か、高度的かについては、「人類史の一般法則として、狩猟・採集の生活から遊牧の生活をへて、農業へと進化してきた」という直線的進化論にもとづく生活様式の発展段階説と、「狩猟・遊牧・農業という単純な発展段階説ではなく、むしろ、遊牧あるいは牧畜という生活様式をもって、一種の特殊化とみなし、農業とならんで、それとはべつの道に発展したもの」という後藤十三雄の高度発展説の見解を論述している。

また、モンゴルの牧畜をどう評価するかについても、日本の畜産技術の基準を用いて、モンゴル畜産のおそるべき後進性を指摘する意見と、それに対して、個々の技術の技術論的評価よりは、牧畜技術の全体としての整合性、あるいは自然環境、社会、文化に対する適合性などを高く評価する意見という、ふたつの評価を紹介し、梅棹の立場としては、理論的には後者に同調するという(梅棹 1990 : 136)。しかし、牧野の経営、または移動の方針について、定性的な意味で、ある程度の方針はあるが、それは決して牧野の計画的利用ではなく、草地の状況に応じて立案された計画にもとづく移動ではないという見解を示している(梅棹 1990 : 138)。

⑦～⑩では、遊牧の起源とモンゴルの牧畜経済について論じている。まず、遊牧の起源について、遊牧の移動性を把握し、「遊牧の起源を狩猟にもとめる場合は、その説明もかんたんであります。狩猟時代から、有蹄類のうごきにひきずられるかたちで、すでに生活は移動性を有しており、遊牧における移動性もまた、対象である有蹄類がもつところの動物本来の性格に起因している。」と考え、「このように、蒙古の牧畜にみられる移動性は、遊牧の起源ともかかわる本質的な問題であります。けっして、自然環境の必然性によって、移動しているわけではありません。むしろ、対象に由来する必然性が、発祥以来ずっとつづいているために、いまなお移動しているとかんがえられます。したがって、蒙古の遊牧は、一方で、自然的な動物の習慣に依存してはおりますが、他方では、文化的な習慣によって移動している。」(梅棹 1990:139)と、移動という事象を立体的に捉えることに成功していると思う。

モンゴルの牧畜経済について、梅棹は「自然経済説」を唱え、つまり、モンゴルの牧畜経済を自然経済とみる立場であり、原始経済とは少々異なり、決して意識経済ではない(梅棹 1990:144)という。梅棹説の論点をまとめて言えば、技術的にも、経済的にも、モンゴルの牧畜は、絶対に高度のものではない。そもそも日本の牧畜と比較すべきものではなく、家畜の自然な行動に適応するという意味の自然牧畜なのであると評価している。

さらに、「蒙古牧畜社会のとらえかた」を検討したい。⑪には、牧畜社会の適応性について、自らの現地調査から観察して、モンゴル遊牧民の社会は、牧畜を中心に上手く組み立てられているという後藤の見解に同意している。

ところが、⑭では「アイル」について、どうも孤立的にみているようである。この点については、「漢人の個人主義に対して、蒙古人の全体主義が空想されがちですが、じつは反対で、蒙古人こそひじょうな個人主義、よくいえば家族単位の個人主義であります。」(梅棹 1990:150)という考えは妥当ではない。アイルは、独立した家族単位と言ってしまっているのか。アイルだけを検討するのでは意味がみられない。つまり、社会単位であるアイルについて考える場合に、「ホト・アイル」や歴史上の「クリエン」についても考慮を払う必要がある。じつは、アイルとは独立的に存在しえない。アイルは、けっして、独立的な単位ではなく、もともと「ホト・アイル」という共同設営集団の基本単位であり、モンゴルの牧畜社会において、もっとも大切な社会構造の組織的なものである。ホト・アイルは、直接生産者の自治組織であり、二つか、それ以上のホト・アイルは一つのホトとなる。小長谷によれば、考慮する範囲がひろがると、ホトという語がしめす領域はひろがる。一番小さなホトは、設営地の空間をさしめす。そのホトを構成する集団のなかが「ホト・アイル」とよばれる設営集団である。その「ホト・アイル」をかりにアイルとみなして集合させれば、より広範囲で、上位概念のホトになり、より広いホトを構成するアイルの数は増加する(小長谷 1991:25-28)。

しかし、戦後、内モンゴルに「社会主義の自治区」を建設するために、ホト・アイルを破らなければならないという中国共産党の指示で、この伝統的な牧畜社会の構造が解体されていった。

⑭では、ラマに注目した考察は興味深い。梅棹は、従来の、ラマとは、甚だよくないもので、モンゴル人の人口制限の最大因子であるというラマを非難する一般通念を訂正して、養妹制度などにより、ラマは、じつに人口増に一定の貢献をしたことを指摘し、またラマ廟が固定拠点となっていることや、貸しつけ家畜を提供していることなどを高く評価し、ラマが牧畜に益をおよぼしている（梅棹 1990：151）という見方は、当時のモンゴル研究において異例な見解であり、モンゴル牧畜社会におけるラマ僧院の位置づけを考えるうえで重要な参考になろう。これは信頼のおけるものであると考えられる。

以上で述べたように、「本報告」が新しい見解を探究していることは評価すべきであるが、いくつか気になる点もあった。じつは、本稿執筆の動機が、これらの問題点を問うところにあった。

以下、4節に分けて議論したい。

3 チャハルとシリーンゴルについて

「本報告」の⑯のところ、次のような一論がある。それは、現地調査を実施したチャハルとシリーンゴル両地方の比較から導かれた、牧畜社会の近代化に関する捉え方であると考えられる。

「チャハルはシリーンゴルよりすすんでいます。どの地域差よりも強調しておかなければならない差が、こうしたチャハルとシリーンゴルの段階差であるとかんがえます。チャハルは、シリーンゴルにくらべて、各方面ですすんでおり、これは、牧畜そのものについても、牧畜社会についてもいいうることです。

牧畜そのものについて、いくつか例をあげてみます。たとえば、家畜管理法に関してもうしますと、チャハルでは、たいいてい家は畜舎をつくっています。あらかじめ草を刈っておき、冬になると、幼畜にはかなりおおくの乾草をあたえます。なかには、濃厚飼料の萌芽とみるべきものもあります。チャハルには、家畜放牧者という分化した存在もみとめられます。また、畜産加工の点においても、たとえば、乳製品の製法系列はスニトより断然すぐれているといえます。原理においてはセパレーションであり、われわれの系列とおなじものをうみだしているからです。しかも、スニト的系列をも保有しています。

さらにまた、家屋は固定して不必要な移動はなくなり、しかも必要なぎりぎりにおいての運動性を保有しているのです。これらの点からみても、従来ややもすればシリーンゴルこそ純粹の牧畜地帯であり、チャハルは漢人の影響のもとにほど変形をうけ、ゆがめられた、くずれた牧畜であるとみられがちでしたが、事実はむしろ逆で、チャハルのほうが牧畜として完成にちかづいている、とかんがえられます。

経済方面についてもすすんでいます。チャハルの牧畜には、すでに牧畜的要求がくわわつ

ていることを、見のがすわけにはゆきません。(中略) けっきょく、チャハルのほうがよほど近代的牧業に接近しているのです。

社会の面からみても、行政活動の活発なうごきがみとめられます。」(梅棹 1990: 153-154)

そして、⑰の「漢人との接触」では、チャハルはシリーングルよりはるかにすすんでいるというさまざまな現象を解釈して、昔からこうした段階差があったのではなく、ここ20世紀に入ってからのことであり、「チャハルはすなわち、近年になってからぐっと近代化したものとおもわれます。また、近代化をうながした要因としても、まず、固定化をもたらしたとされる漢人の入植の影響をあげるべきでしょう。」(梅棹 1990: 154) という。

いったいこれは、どこで証明できてきた結論なのか。たしかに、チャハルとシリーングルとのあいだに、地域差がみられる。家畜管理の面にしても、乳製品の製法や畜産加工にしても、仕事のやり方の面でチャハルのほうがシリーングルより緻密であるところがある。しかし、それは、漢人とはまったく関係のないことである。そういう地域のあいだの差は、そもそもほかにみられる。ブリヤートとバルガ、トルゲートとハルハなども例として挙げられる。たとえば、乳製品生産、作物栽培や牧畜経営構造の方面で、ブリヤートのほうが、フルンバイルのバルガよりすすんでいるところがあり、そこにも地域か部族の差があらわれる。それらのむかしからあった地域や部族の違いを、それが、近代以来の漢人との接触によって、どちらがすすんで近代的牧業に接近しているとする梅棹の理解は、すすんでいるとみられる全てを漢人側に引き寄せたいがための偏った見解といわざるをえない。

地域の段階差をどう考えるべきであろうか。さきほども述べたが、モンゴルのさまざまな部族や地域は、それぞれの環境で生きていくうえで、生来よく遊牧生活の能力と牧畜技術を習得し、そこにはいろいろなバリエーションが生まれる。各自の経験を通じて発達させた知識の活用があるため、変化や段階差が生じる柔軟性がある。

しかし、梅棹は、その地域的な段階の「差」に優劣の評価を加えるとともに、「漢人の入植の結果は、牧民の環境と生活を破壊した。」(後藤 1942: 299) という後藤の見解に対して反論し、逆に「チャハルのほうが近代的牧畜として完成にちかづいている。」とするが、これによって、牧地の狭小化がもたらしたもっとも大きな悪影響を無視することは、決して適当ではない。

それでは、漢人入植がチャハル牧民の環境と生活を破壊せず、逆に当該蒙地を大いに近代的牧業へ接近させたというのは、一体何を指しているのか。梅棹は、後藤らとは異なる立場から述べていることが理解できるが、しかし、どの視点から見ても、崩壊の危機にある蒙地の事情を考え合わせるとにわかには首肯し難い。

梅棹は、チャハルの実態を1944-45年の時点で捉え、その前の歴史的背景、すなわち

清朝末期以降からの事情を考察できなかった。あるいは、その意味の考察をしなかったのである。「その前」の無視は、梅棹の論の限界性を示す結果となった。

チャハルとシリーンゴルについて、ほかのさまざまな資料を見ても、シリーンゴルもシリーンゴルの特徴があって、すぐれていたものも指摘できる。良馬の飼育や民族服装の製法については、となりの地域より著しく発達したことが考えられる。民族学や地域差についての研究は多岐にわたるものであり、筆者のよく論じるところではない。それはさておき、「本報告」に重視されている論考について議論を展開したい。

4 漢人入植に対する梅棹の見解

周知のごとく、20世紀初期、清朝は、モンゴル地域における漢人の活動を制限するいっさいの法令を廃止し、漢人の大量入植を目的とする対モンゴル「新政策」が実施された。日露戦争後、この「新政策」は、内モンゴル各地に展開され、農耕民の入植はモンゴル地域へ広がっていった。漢人商業、高利貸資本がモンゴル地域に急激に進出し、旅蒙商の商業活動が活発となった。しかし、一方において、遊牧民たちは、膨大な負債の返済に追われるようになり、モンゴルの家畜や毛皮は、旅蒙商に容赦なく持って行かれ、牧民のみならず、モンゴルの王公領主と僧侶層をも含めて、その生活は窮乏の極限に達していた。こうしたなかで、旅蒙商の搾取や牧場開墾に対して、モンゴル人は反抗と暴動を起こした。1903年には、外モンゴルのザサクト・ハン部で平民アヨシの指導する牧民運動がおこり、1905年には、内モンゴルのゴルロス部でトクトホ・タイジの指導する武装蜂起が展開した。また、同時期に、ジャライド旗とイヘ・フレーにラマ騒動が起こった。これらの反抗は、近代民族独立運動が展開される時期におけるモンゴル人の反清=反漢意識を代表する典型的な事例であったといっていよう。トクトホらの蜂起では、漢人買売家を追放し、旅蒙商の店舗を襲って、借金の証文を焼き払い、商品を奪ってモンゴル人に分け与えていた。こうしたモンゴル人の反抗は、漢人旅蒙商に対してなされたものであったが、モンゴルにおける近代的民族独立運動の兆しとして評価することができる（周太平 2008：82）。

これに関連して、多くの研究者によって、牧野の狭小化、漢人の買売家の搾取、漢人入植による草原侵害などの根本的な問題が見出されている。そういう研究の方向性に、ポズトネフ、ウラヂミルツォフ、オウエン・ラティモア、ワルター・ハイシッヒ、田中克彦らによる重要な業績があらわれた。しかし、梅棹は、それとは逆に、それらの先行研究の見解にまっこうから反対している。梅棹の反論が、はたして妥当なものであるかどうかは、論より証拠、実証分析によって確認されなければならない。

以下に、「本報告」の原文を引いて一読してみよう。

「一般に、チャハル牧民は、漢人の圧迫によってひどい目にあい、いまや崩壊の危機にあるというのが定説になっています。わたしは、ここでもまた、一般の定説に対して疑問をさしはさむことになります。

漢人の進出によってもたらされた弊害として、まず第一に、牧野の狭小化が強調されており。たしかに、せまくなつたのですが、そして、せまくなつたから、遊牧移動がやんでしまう結果をうんだのですが、だからといって、牧畜ができなくなったというわけではありません。遊牧しなくなったために家畜が死んだのでしょうか。そもそも、遊牧というものは、なにも草のせいではないことを、わたしはすでにのべました。ですから、こんな質問自体が成立しません。チャハルは固定しました。固定して、じゅうぶん牧畜をやっています。固定してみると、意外になんともなかったのです。現に、中尾君の牧野調査によれば、チャハルはけっして飽和していません。せまくなつたはずの現在のチャハルの牧野すら、全面的に利用するほど家畜はいないのです。この点からみますと、チャハルが漢人によってひどくめいわくをうけているとはいえません。

弊害の第二に、漢人の買売家（商売人）が搾取したといわれます。しかし、マイマイチアマイマイチアと蒙古人の関係は、ふつうの商取引であります。漢人のマイマイチアの側に見れば、その顧客である蒙古人が支払えないにおちいるようなことは、得策ではありません。かならず、一定限度しか売らないのです。両者は、おたがいに必要な関係でした。（中略）

第三に、漢人農民との直接接触も弊害とされてきました。しかし、これによって、じつはチャハル牧民の食料供給の安定化という興味ぶかい結果がもたらされました。シリングルが食料にこまるのを尻目に、農民を多数かかえているチャハルのタイプス右翼、ホボー・シャル（廂黄）などという旗は、食料があまっている状態です。

第四に、労働力の導入という問題があげられます。ヒツジ飼い、炊事などにたずさわる漢人がおります。その結果、生じてくる余剰労力をどのようにつかうか、という点について、問題としなければならないのです。これなどは、弊害とはいえません。

こうして、通説を検討してみますと、けっきょく、漢人によってもたらされたものは、チャハル牧民にとってよいことのほうがおおかったのであります。」（梅棹 1990：154-156）

以上の引用が、つぎの4点にまとめられる。まず1点目は、チャハル・モンゴルは、漢人進入によって、ひどく迷惑をうけているとは言えない。また、漢人商人がモンゴル人を搾取したという認識は間違っている。さらに、漢人農民との接触によって、牧民の食料供給が安定化できるようになったという等々、牧民にとってよいことのほうが多かったのである。そして、4点目は、モンゴル地方へ漢人労働者の移住が必要である。

5 梅棹見解への批判

上記の諸点は、「本報告」で筆者がもっとも印象強く感じた個所の一つである。ついで、1点ずつ検討する。

第1に、漢人の蒙地進入にともないモンゴル人は北方に駆逐されていた事実には疑いない。この点については、史料が非常に豊富であり、証拠が確かであることができない。

い。『満州に於ける蒙古民族』、「モンゴル族の運命」など多くの実証研究でも深く考察されているので、ここでくりかえさない。一言でいうと、内モンゴルへの漢人の移住がすすみ、東南部を中心に入植し、その経済的・政治的勢力は、奥のほうへ拡大し、モンゴル人の生活空間は、従来より狭められつつあり、内モンゴル諸部では牧地の減少がはなはだしかった。戦前日本側やロシア側の記述からもそれらの実態が証明できる。

第2に、漢人旅蒙商については、野外調査などを盛り込んだそれまでの重要な成果を検討せず、とくに当事者双方の売買行為の状態に目配りせず、ただ一般的・抽象的に論じることは、かえって議論に混乱を招く恐れがある。

1909年、いわゆる「墾務計画」と呼ばれる清朝のモンゴルの開発計画が実施されると、漢人旅蒙商会は、前から借金の担保として所有していたモンゴルの土地を活用しはじめた。それを農耕地にするか、旅蒙商会の牧地にするか、さもなければ転売するかされた。北京墾務総局は、こうして旅蒙商を通じて、モンゴルの肥沃な牧地を領有するようになった。当時のロシアの調査隊の報告書には、次のように非難している。

「以前は、モンゴルの家畜はここに数千頭、むこうに数千頭と草を食み、牧民が10人、100人と放牧している光景が見られた土地は、今や、家畜一頭、ゲル（牧民の家）一戸すら見当たらなくなった。モンゴルの人々はすべて、自由に暮らしていたハンガイ地方の谷間の広い空地や大きな川から退去させられ、水がなく、牧草の質が悪いゴビ砂漠に追いやられてしまった。（蘇聯科学院、蒙古科学院編 1958：191）

また、ロシア政府に派遣されたモンゴル駐在代表クロパトキンの報告によれば、1911年の時点で、中国商人に転売された土地は、外モンゴル北部だけで、490万5000デシャーチンに達したという（蘇聯科学院、蒙古科学院編 1958：191）。ヘクタールに換算すれば、932万 ha である。

漢人商人の活動は、内外モンゴル全体に波及していった。食料品、衣料品などの生活用品をはじめ、あらゆる種類の商品を売るため、借入金を急激に増加させ、遊牧民たちは膨大な利子の支払いに追われるようになった。利子支払いと称して、貴重な家畜や毛皮がどんどん持ち去られて行くのを座視しなければならなかった。ここで「大盛魁」の例をみると、同商会は、毎年高利貸の利子として、外モンゴルから馬7万頭、羊50万頭を取り上げた。これは、外モンゴルからロシアに輸出される年間の家畜の総数をはるかに越えるものであったという（原山 1990：124）。

そして、漢人商人、高利貸者、農民、手工職人たちが、モンゴル各地に徐々に入り込み定住するようになり、売買貿易のほか、漢人移住者は大工、建築、野菜の栽培などの仕事に従事するようになった。ウラヂミルツォフは、次のように記している。

「支那商人は昔のような国境市場では満足しなくなり、ステップや山岳の蒙古人の中へ入っ

て、原料や畜産物を買入れ、支那商品、次いでヨーロッパ商品を売り込んだ。商人と共に支那の高利貸、大小の銀行家、各種の投機屋が蒙古人の中へ侵入し、続いて、手工等の職人や農民が蒙古へ移住した。農民の移住が最も著しかったのは南蒙古である。」(ウラヂミルツォフ 1980 : 432)

このような情勢のなかで、旅蒙商の不断の搾取と農業移民の牧地破壊により、モンゴルの経済的支柱である家畜が、大量に漢人商人高利貸者の手に渡り、牧畜が激減し、草原破壊は激しくなり、社会経済が全面的に破産し始めた。

したがって、漢人商人とモンゴル人の関係は、ふつうの商取引であるとして取り扱われるべきではないかもしれない。モンゴルの経済は、完全に漢人商人高利貸者の支配下におかれたという点だけでも、その物価変動、財産の流失、詐欺など一般には取引とはみなさないものである。こうして、牧民と旅蒙商のあいだに、ふつうの商取引が成り立terことはきわめて困難だと推察する。そこで、梅棹が指摘したような「商取引」という枠組みを一律に適用することは無理である。

第3に、漢人植民に対する認識は、モンゴル近代史の捉えかたともかかわってくる問題である。漢人との接触の弊害についても、梅棹は疑問を表明し、逆に、多くの益をもたらしたと主張している。しかし、同じくチャハルの実例として、後藤は、つぎのように述べている。

「漢人の植民は、チャハル蒙地の南半を奪うことによって、その北半の荒廃化を促進した。恐らく、チャハルの蒙古人の牧業は、牧地の狭隘化にともなう家畜の疾病と牧野の破壊とのために、前途には容易ならぬものがあるのではなからうか？蒙古牧民の遊牧的技術はすぐれたものであるが、経済的条件を異にした場合には、もはや社会的生産を維持するには適当でない。」(後藤 1942 : 298)

これに関連して、オウエン・ラティモアは、牧民のゲルはあまり密集しすぎて、牧草は到底足りない。夏冬の放牧に移動する余裕もない。さらに、干ばつと家畜の伝染病が猛威を振るい、まことに悲惨な状態にある。したがって、チャハルモンゴル人の遊牧民でも、他の本来のモンゴルの大自然の下に生活しているモンゴル人とはまったく比較にならないのである、と指摘している(ラティモア 1938 : 248)。

漢人植民による蒙地開墾の情勢について、安齋庫治は、第二次世界大戦中、当時のウランチャブ、イヘ・ジョー、バヤンタラの各盟における各時期の開墾の進展過程を調査した。その成果は、『満鉄調査月報』を通じて発表された。それによると、「光緒三十(1904)年郡王旗は私墾の禁厭を企てんとしたが、このために蒙漢両族の衝突をまきおこし、多数の死傷者を出すに至った。同じく扎薩克旗においても蒙漢人間の空気は険悪化し、絶えず衝突がくりかえされていたようである。」(安齋 1939 : 39)とあり、そし

て、これらの頻発する蒙漢民族の紛争事件は、漢人官庁によって調停されるのを常とした。しかも、このような調停はあらゆる場合において漢人に有利に処理し、蒙旗の主張と権利は無視されていた。モンゴル地方では、漢人官僚主導による蒙地開放政策によって、より深刻な社会的矛盾が蓄積されていった（周太平 2008：81）。

⑰では、農民を多数かかえているタイプス右翼旗やホボー・シャル旗は、食料があまっている状態であるというのが、果たしてこの一例をもって、「漢人植民によって牧民の食糧供給の安定化を実現した」という図式を示す例として一般化できるのか。後藤は、昭和15年のタイプス左右両翼旗一帯での調査結果を挙げて、民国以後の植民同化政策は最も注目すべきものであり、チャハル・モンゴル地域は、70%まで移民の侵入を蒙るにいたって、あるものは牧地を縮小せられ、あるものは全く故郷を離れて移住を余儀なくされている（後藤 1942：277）、という極めて深刻な問題は、梅棹の議論ではほとんど重視されていない。蒙古連合自治政府の生活共同組合（ホルシャ）が設置される前に、タイプスの牧畜部は、かなり食糧事情が悪く、餓死者も出ていた（沈斌華 1983：9）。元来、牧民たちは、土地を失って、生活の基本的な基盤が崩れていく以上、食料供給の安定なんかを云々するまでには至らない。

第4に、労働力の導入という問題。さきに触れたように、チャハル・モンゴル地域の場合は、もう70%まで漢人の侵入を受けているにもかかわらず、また、さらに「漢人労働力の導入」を促進するとならば、どういう結果になっていくのが推測に難くない。それは、文明国のように外国人労働者の流入が国内労働市場に与える影響を考えるぐらいの感覚とは、まったく別のものであり、みなを同一に論じることはできない。モンゴル地域においては、もっとも前提として、モンゴル人の生活基盤を維持していかなければならない。そこで、ラマ教改革や医療保障や労働力の再生産などの構造的な面からの労働力不足を考えるべきである。このような措置によって、ある程度労働力人口の減少を抑えることができるが、短期間で、労働力不足を完全に補うことは難しい。一つの選択肢としては、満州国のモンゴル人の導入も視野に入れるべきである。戦後、内モンゴルの牧畜地域には、東部農耕部のモンゴル人の導入によって、その労働力不足を補うことはできたのである。

また、⑬では、モンゴルの社会は、非常に単純な職業構造で、みな大なり少なり牧畜生産をいとなんでいる（梅棹 1990：148-149）という説にも多少の違和感を覚えた。歴史上、一部の地域が漢人による大工仕事や野菜の栽培が行われていたのに対し、オルドス、トゥメト及び東モンゴルの多くの地域は、すでに16世紀以来の経済回復のなかで、社会形態の細分化がすすみ、モンゴル人自ら手工業、農業、および金銀細工までに従事するなど、職業の分化の現象も生じていた。

以上、「本報告」に唱えられている見解を検討してみると、フィールドワークによる最新成果から自ずと導かれたものではなく、むしろ全部逆手にとらうとして言っているよ

うな論旨が目立ついっぽうで、事例を示せず地域をこえて普遍化している、その理論的枠組みが弱いものであり、説得力を持てるかどうか、疑問なしとしない。

いったい、梅棹は何をみてそう思ったのか。現段階でフィールド・ノートを含む梅棹アーカイブズ資料で確認できないが、ローマ字カードの公開により今後より一層詳細な検討が必要である。

6 近代モンゴル人の歴史意識から考える

つづいて、上述の拙い意見を踏まえて、梅棹のモンゴル近代化認識について確認しておきたい。⑮の「蒙古の近代化」では、つぎのような一文がある。

「もちろん、若干つごうのわるいこともありました。なかでも、風俗習慣の漢人化は、おおきな問題です。そのために、蒙古は幾分、その主体性をうしなって漢人に同化されました。しかし、いちばん重要なことは、けっきょくは蒙古人があらたな知恵を身につけ、ひいては社会が発展した、ということになるのではないかとおもいます。漢人との接触がもたらす転換とかがえれば、こうした過程は、世界のいたるところに共通する現象であるとおもわれます。漢蒙どちらがよいわるいの問題ではなく、必然的な結果とみるのであります。

シリングルとチャハルとの差に話をもどしますと、つぎのような仮説を提示することができます。チャハルはすでに、シリングルに一步さきんじて、近代的再編成の過程にある。そして、近代化の力が、チャハルよりもいっそうはやく作用し、完了したのが満州の熱河地方の蒙古人地帯である、と考えられます。」(梅棹 1990 : 156)

モンゴル人は漢人に同化されてから、新たな知恵を身につけ、社会が発展したという梅棹説は、無理を重ね説得をすすめているように感じられる。どこに根拠があるのか、どういうロジックで導かれた結論なのか。率直に言って、浅学な筆者は若干混乱した。

まず、モンゴル人にとっていえば、習慣の漢化はそもそも最も嫌われるものである。とにかく、民族自尊心をもって生活している人々の視点に立って見れば、梅棹説には、モンゴル人の漢人に同化されることを合理化し、いわゆるその「重要なこと」を説明しようとする無理を感じる。

満州族の清朝支配下で内外モンゴルは、最初の一世紀間は大きな混乱に直面することはなかった。ところが、19世紀ごろから始まる漢民族の北方移住は当該地域に大きな影響を与えた。とくに、4節の冒頭で述べたように、1901年「変法上諭」以降、モンゴル各地において、漢族とのあいだに民族衝突が起こり、漢族への恐怖や嫌悪感が強く、「反漢意識」が近代モンゴル民族のアイデンティティを形成してきた。すばやく、モンゴル人のあいだに、次のような天の厳命という訓令が伝わっていた。「白い帽子をかぶり、漢族の靴をはいて、漢人のまねをしたりしたモンゴル人は死ぬにちがいない」と言われた。そういうことを全部やめれば何事も起こることなく、モンゴル人のよき時代が開け

るであろう」。この教書について、第二次世界大戦前、内モンゴルに調査をおこなったワルター・ハイシッヒが言及している（ハイシッヒ 2000：300-301）。これは、近代モンゴル人の歴史意識と無関係とは言えない。

また、⑮では、いちばん重要なこととして、モンゴル人社会は漢人入植の影響で発展したとする結論を考え直さなければならない。

20世紀のはじめごろの蒙旗改革の時期からはじまった日本と清朝内地へ留学生派遣や近代的教育の実施によって、モンゴルのわかものたちが新たな知恵を身につけるような社会的事象があらわれた。それまで、宗教に熱心なモンゴル人は、チベット語を身につけ、様々な知識を遊牧社会に広げていた。そして、さきに述べたように、20世紀初頭、歴史的転機が訪れた。モンゴル人が新たな知恵と知識を求め、西方の仏教世界を目指していた伝統が徐々に変わり、わかものたちがその反対方向の東方にある「太陽の国」日本に新しい知恵を探求するようになった（娜仁格日勒 2013：56）。ことに、日本人が創成した満州国は教育に力を入れ、村々にいたるまで学校をつくりあげて、モンゴル人の近代化に大きく貢献した事実を忘れてはいけない。チャハルの場合は、蒙古自治邦の近代教育の中心地域であった。いずれにしても、モンゴル人の進歩とその社会発展とは、漢人との接触がもたらしたものであることは理解し難い。これは見当ちがいである。少なくとも、一般論としては説得力を持たないと思う。

民国以後の中国においては、殖民同化政策、じつは露骨な蒙民抹殺政策が公然と取られたのである（後藤 1942：276）。民国政府だけではなく、むかしもいまま「殖民同化」政策は、一脈相承であり、モンゴル人の「分離自立権」をききいれる中国の政治家は、だれ一人いない。

しかし、もっとも、「梅棹報告」には、あくまでも、殖民同化のいわゆるプラスの面というものを強調し、近代以来のモンゴル社会は、決して漢人入植のひどい影響をうけて崩壊の危機にあったということを認めないと述べている。当時の梅棹の見解は、のちにも考え直されることがなかったようである。「三六年ぶりのモンゴル」（1981）のなかにも、氏は、つぎのように述べている。

「この内蒙古自治区も、人口からいえば、漢族および回族が圧倒的におおいのだが、モンゴル人の自治区であるから、モンゴル族およびモンゴル文化はおおいに尊重されている。役所などの看板には、漢字とならんで、かならずモンゴル語が併記されている。ここでは、漢文化とモンゴル文化とは、対等に並立しているのである。こういうことは、むかしの蒙古自治邦においてはまったくみられなかったことである。」（梅棹 1990：629）

これは、梅棹の近代モンゴル社会認識論の一貫性をものがたっていると考えられる。いまの内モンゴルについては、表面的なものをみるのではなく、その本質の意味を捉える必要がある。そうではなければ、日本の読者を誤解させる恐れが非常に高い。いま

の内モンゴルの現状を中国政治の一側面として読み取る意義は決して小さくない。

これは、梅棹だけの問題でなく、日本側の中国少数民族に関する研究には、中国の実質のないいわゆる「民族区域自治」に同調するような言い方がみられる。このような見解は、中国の少数民族に対する「殖民同化政策」に拍車をかけるにほかならない。

たとえば、いまの内モンゴル自治区と蒙古自治邦とは比較することはできない。蒙古連合自治政府は独立政権であり、蒙古自治邦はほとんど独立国家の体制を立てていた。両者については、はじめから比較するのが無理なのである。戦後の内モンゴルは、中国に支配されて、植民同化がほぼ完成している。モンゴル人の自治区とは、名ばかりで、真の有名無実である。内モンゴルで表面にみせている中国語とモンゴル語の併記は、単なるかざりに過ぎない。中国の民族平等なんかはにせものだ。今日の社会的・経済的などのあらゆる面で強大な影響力をもつ中国語の前に、モンゴル語は危機に瀕している。それでも、内モンゴルのモンゴル人は母国語の存続と民族語環境を守ろうとたたかいを続けている。

7 結語

以上、六節にわたり、「梅棹報告」に関する内容と意見、あるいは批判を述べた。じつは、梅棹はフィールド・ノートに、牧民の生活状態や漢人商人などについての種々の記録を残している。しかし、調査結果の未整理の事情もあったのか、重要な資料があるだけに、根拠の乏しい議論を進めるのは、調査報告として失われたものは大きく、そのことには断りがなく納得できない。

梅棹は、「歴史認識論」において当時の諸説に反対しようとしていた。ところが、唯一文明発展・段階という点であやしく「漢人との接触による文明化」という定説で合致するが、そこがモンゴル人からみると間違っているといわざるをえない。要するに、いわゆる「漢人との接触による文明化」という定説は、「反漢意識」をもつ近代モンゴル民族のアイデンティティに合致しない。つまり、「梅棹報告」に対しては、モンゴル人の主観的価値観から見れば、梅棹の議論とは違った解釈ができる。

中国の研究では、「漢人の助けがなければ、モンゴル人は発展できない」、「先進的な漢人の大量移住が必要だ」、「歴史上漢人旅蒙商は、モンゴル商業経済の主役を務めた」といった漢族中心の立場に貫かれているものは、とくに珍しいことではない。しかし、今回、「梅棹報告」にあらためて刺激をうけ、われわれとのあいだに歴史認識は全く異なっていることに気づいて、この小稿を草してみた。ただし、モンゴル近代史を専攻してきたことからくる目配りの狭さは、ご了承がいたい。本稿の内容は、筆者個人の考えに基づいており、すべて筆者個人の責任である。

参考文献

安斎庫治

1939 「清末に於ける綏遠の開発」(下)『満鉄調査月報』第19巻第1号, 大連。

梅棹忠夫

1990 『梅棹忠夫著作集』第2巻(モンゴル研究), 中央公論社, 東京。

ウラヂミルツォフ

1980(1939) 『蒙古社会制度史』外務省調査部訳, 原書房, 東京。

小長谷有紀

1991 『モンゴルの春—人類学スケッチ・ブック』, 河出書房新社, 東京。

後藤十三雄

1942 『蒙古の遊牧社会』, 生活社, 東京。

周太平

2008 「清朝末期のモンゴル社会経済情勢と漢人旅蒙商」『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』(西村成雄, 田中仁編), 汲古書院, 東京。

沈斌華

1983 『蒙古族人口史談』, 内モンゴル大学科技情報資料室蔵, 呼和浩特。

蘇聯科学院, 蒙古科学院編

1958 『蒙古人民共和国通史』, 科学出版社, 北京。

娜仁格日勒

2013 「一人の内モンゴル人教育家の夢と不遇な運命」『アジア研究』(静岡大学) 8 : 55-65。

ハイシツヒ著, 田中克彦訳

2000(1967) 『モンゴルの歴史と文化』, 岩波書店, 東京。

原山焯

1990 「モンゴル族の運命」『アジアと日本』(開学記念事業委員会編), 桃山学院大学, 大阪。

本田靖春

1992 『評伝今西錦司』, 山と溪谷社, 東京。

米内山庸夫

1943 『蒙古草原』, 改造社, 東京。

ラティモア, オウエン著, 後藤富男訳

1938(1934) 『満州に於ける蒙古民族』, 善隣協会, 東京。